

湾岸戦争週報

No. 1
91. 2. 15

もう一つの目

責任編集：梅林宏道

発行：トマ喰い虫社

連絡先：電話 045-563-5101 FAX 045-563-9907

「国際的貢献」

湾岸危機を契機に「国際的貢献」という言葉が、日本の政治のキーワードのように語られ始めた。湾岸戦争が始まって、その傾向は一層強くなっている。この言葉によって日本政府が意味しているものは、第一義的には多国籍軍に対する協力であろう。

しかし、ことはそんなに単純ではない。90億ドルがそのためのものであることは間違いないが、自衛隊機を難民輸送に飛ばそうというのは、多国籍軍に何ら貢献しない。ねらいは全く別のところにある。また一方で、9

0億ドルにだけ気を取られていると、日本政府が多額の経費を払っている在日米軍基地が、すでに湾岸戦争に多大な「貢献」をしている、もう一つの事実を見落としてしまう。

湾岸戦争を契機に語られ始めたこの言葉を、ウサン臭いとして片付けてしまうよりも、たっぷり付き合うことを提案したい。日本の「国際的貢献」を検証するいいチャンスである。

「一国的平和は許されるのか」（市川雄一公明党書記長、2月5日衆院予算委員会）という問いかけには、多くの日本人が共感する。

「一国的平和」への反省が「世界的平和」につながるのか「世界的戦争」につながるのか、私たちの課題である。

在日米軍の動き

湾岸戦争に在日米軍基地は活発に動いている。イラクがクウェートに侵攻した8月2日以来、在日米軍は新しい体制に入った。

その状況を、最も早くキャッチしたのは、米海軍上瀬谷通信基地を監視している「ウドの会」（ウドは基地に土地を取り上げられている農民が始めた特産物）のメンバーである。彼は、その日を境に基地のアンテナの一つが太平洋からインド洋に向きを変えたことを確認した。

在日米軍基地の中で、最も早く湾岸に兵を送ったのは、在沖縄の第3海兵遠征軍である。8月7日から8日にかけて嘉手納空軍基地の輸送機に乗りこんだ。在日米海軍の第一陣は、

横須賀を母港とする第7艦隊の旗艦ブルーリッジ（司令官ヘンリー・H・モーズ中将）であり8月14日に横須賀を出航した。ブルーリッジは米中東派遣軍海軍部隊の旗艦となった。在日米空軍の第一陣は、おそらく沖縄の嘉手納基地の第961空中警戒管制飛行隊の空中警戒管制機（AWACS）であろう。イラクの奇襲に備えるために一日も早く一機でも多くのAWACSを必要としていたからである。8月8日にAWACS1機が姿を消したことが確認されている。

以来、在日米軍基地は戦争に向けてフル回転を開始した。その活動は次の3分野に大別される。

①戦闘部隊の出動 沖縄、岩国の海兵隊、横須賀の空母ミッドウェーとトマホーク発射艦など、攻撃の中心部隊が、日本の基地から

出動した。

②**兵站補給・輸送** 広弾薬庫（呉）から電子戦争用の弾薬が佐世保経由で輸送されたり、相模補給廠（相模原市）から波型鉄板や、医療品が湾岸向けに搬出されている。針尾弾薬庫、前畑弾薬庫（いずれも佐世保）から弾薬輸送船に弾薬がピストン輸送された。嘉手納基地から空中給油機も出動している。

③**通信・指令任務** もっとも見えにくい活動だが、在日米軍と中東派遣軍・ペンタゴンをリアルタイムで結ぶ神経中枢である。上瀬谷基地の例の他に、普段は畳まれていて緊急時にしか立てられない沖縄の泡瀬（アワセ）海軍通信基地のスコープ・シグナルⅢのアンテナが立てられた。大統領の直接指令を旗艦に伝えるためのものであるとされている。

■戦闘部隊 1. トマホーク艦

横須賀のトマホークが発射された

横須賀を母港としているイージス巡洋艦モービルベイからイラクに向けてトマホークが発射されたことが明らかになった（BBC放送）。横須賀を母港とする軍艦からのトマホーク発射が確認されたのは初めてである。

米海軍のトマホーク艦が海外を母港としている例は、世界中に横須賀だけである。横須賀を母港とするトマホーク装備艦は4隻あるが、そのうちの3隻が現在湾岸地域に出動している。モービルベイはその3隻の中で最も最近に横須賀を母港にした。実際、湾岸入りしたのは11月7日（在日米軍司令部）であるから、横須賀母港後4ヵ月に戦場についたことになる。慣らし期間直後の出動である。

モービルベイには公称26発のトマホークが、MK41垂直発射艦に装備されている。そのうち6発が核トマホークであると推定さ

れている。発射されたトマホークが、横須賀から持っていったものであることは間違いがない。

横須賀から湾岸派遣された他の2隻のトマホーク艦は、駆逐艦のファイフ、イージス巡洋艦のバンカーヒルであるが、これらもトマホークを発射した可能性がある。

グリーンピースの調査によると、2月12日の時点で、湾岸戦争でのトマホークの全発射数は284発である。現在までにトマホークを発射した艦として特定されているのは、モービルベイの他に、戦艦ミズーリ、戦艦ウィスコンシン、駆逐艦レフトウィッチ、それに1～2発を史上初めて水中から発射したと発表された潜水艦ルイビルである。これらによって発射されたトマホーク数は、最大限に数えても、搭載数から計算して約100発にしかない。実際には特定の軍艦のみが打ち尽くすやり方は避けるので、200発以上が他の軍艦から発射されたことになる。

一方、湾岸地域に現在配備されているトマホーク艦の数は上記以外に20隻余と見積もられるので、平均して一隻が約10発のトマホークを発射したことになる。こう考えると、ファイフ（公称45発のトマホークを搭載）、バンカーヒル（公称26発のトマホークを搭載）もトマホークを発射した可能性が高い。

横須賀を母港にしている軍艦がトマホークを発射したということは次のことを意味する。軍艦のメンテナンスは日本の技術者によって行なわれる。湾岸戦争地域で故障した旗艦ブルーリッジの修理見積もりのために横須賀基地に働く日本人技術者を現地に派遣する計画があったことは、まだ記憶に新しい。彼らの給料の少なからぬ部分は日本政府が支出する。これらの船の乗組員は家族とともに横須賀に住みそこで英気を養う。その住宅は、ほとんど日本の予算で建てられ、彼らの快適な生活

を保証する福利厚生を多くを日本が責任を持っている。

軍艦の日常的な訓練や行動にフリーハンドを与えるために、日本政府は最大限の特典を与えている。米海軍通達（82年3月18日）によれば、通告すら必要の無いフリーパスの寄港特権を与えている。このような特権を米軍に与えている港を持つのは、世界広しと言えども日本以外には韓国とフィリピン以外にはない。

一口に言えば、米軍が世界で唯一のトマホーク艦の海外母港を日本に据えているのは、このように米国内と全く変わらない条件でその発射体制を維持できるからである。「国際的貢献」を言う前に、日本は米軍の戦争体制そのものに、世界に類例の無い「貢献」をしている。その状態は日本の市民の主権をまもる外交を放棄した状態である。自覚的な「貢献」を吟味するためには、この無自覚の「貢献」をまず自覚的にしなければならない。

潜水艦から、史上初めてトマホークを実戦発射したロサンゼルス級原子力潜水艦ルイビルは、サンジェゴを母港にしているが、日本と縁の深い潜水艦である。初期の潜水艦発射トマホークは魚雷発射管から発射されるタイプであるが、ルイビルはトマホーク専用の垂直発射管CLSを備えた新型の潜水艦である。1986年11月に就役して日本には88年に初寄港している。当時、初めてのCLS装備艦の寄港として関心を集めた。以来、以下のように4回日本に寄港している。

- ◆88年12月13～19日 横須賀
- ◆89年4月18日 沖縄ホワイトビーチ
- ◆89年4月19日 沖縄ホワイトビーチ
- ◆89年5月8～11日 横須賀

なお、ルイビルが1月19日に紅海からトマホークをイラク領土内に発射したと米海軍

が発表したことは極めて異例なことである。海軍は、潜水艦は秘密行動を任務とするものであり、個々の潜水艦の作戦行動については明らかにしないという方針を貫いてきた。今回の公表は、海軍史上初めての出来事を記録に留めるために行なわれたと説明されている。しかし、これほど早く公表したのは、海軍の議会対策などを睨んだ宣伝と見るべきであろう。

■兵站補給

日本列島に延びる湾岸補給路

湾岸戦争が長引くにつれて、在日米軍基地の補給基地としての役割が徐々に明らかになりつつある。戦場の補給路は7000キロメートル離れた日本列島に確実に延びている。「ピースリンク広島・呉・岩国」、「相模補給廠監視団」などの基地周辺市民の活動や、地元ジャーナリストの監視の目が実態を暴露するのに貢献した。最近の特長は、米軍当局がある程度、湾岸補給活動の事実を認め始めたことである。2月8日に広弾薬庫（呉）、相模補給廠（相模原市）の湾岸補給活動について米軍当局が、相次いで一部を明らかにした。

湾岸戦争の勃発とともに、佐世保基地に入港していた（91年1月2日に入港）米大型弾薬輸送船クリーブランドに頻繁な弾薬の積み込みが始まった。佐世保の前畑弾薬庫、針尾弾薬庫からのバージによるクリーブランドへの弾薬のピストン輸送が開戦の翌日1月18日には確認された。

クリーブランドには呉の広弾薬庫から15トン積みトレーラー7台、コンテナ7個分の弾薬も運び込まれた。広弾薬庫には、すでに1月になって7回、対岸の秋月弾薬庫（江田

「湾岸戦争週報」を毎号入手希望の方に郵送・FAXサービスを行います。トマ喰い虫社までご連絡ください。☎045(563)5101 FAX045(563)9907 ❧❧❧❧❧❧

島町)で検査を終えた弾薬が海路、一般船舶の航行を止めて運び込まれていた。1月20日夕方にトレーラー3台、21日にトレーラー4台の弾薬が広を出発して佐世保港に向かった。佐世保港ではそれぞれ21日、22日に第一陣、第二陣の積み荷が到着した。それらはコンテナのまま24日朝、クリーブランドに積み込まれた。クリーブランドはその日の夕方出航した。ちなみにコンテナにはAPL、APCの略記がなされていた。(以下の相模補給廠の項目を参照)。

高度の弾薬類を扱う秋月弾薬庫から送られたものが何であるか関心が高まったが、2月8日米軍筋が「敵レーダー波に障害を与える空軍用兵器」(「中国新聞」2月10日)と説明し、軍事的には「チャフ」と呼ばれるものであることが明らかになった。直接、形状が明らかにされていないが、監視者の報告を総合すると弾薬と言うよりもロケット弾であり、空中で軽金属を爆発散布させ、敵のレーダーを攪乱してミサイルから身を守る電子戦防護兵器(ECM)であろう。この種の兵器は、海軍も持っており、電子戦では最も標準的な兵器である。ハイテク戦争と言われる湾岸戦争に日本から大量のECMが補給されたことは興味深い。

相模補給廠では湾岸危機以来、昨年の8月、10月、12月に大量のコンテナ搬出があった。12月中旬にはベトナム戦争以来という規模で医療用物資や車両が運びだされた。最近、在日米軍司令部が神奈川新聞社の質問に答えてその中身を明らかにした。運んだのは460個のコンテナと30個の発電機、約60台の車両であり、行く先は横浜ノースドック経由で「砂漠の盾作戦」、コンテナの中身は、前もって保管していた500ベッド数艦隊病院用物資であった。米軍発表と異なり、実際の積み出し港は横浜本牧埠頭D突堤であるとの報告がある。

湾岸戦争勃発以後では、1月23～26日に大型コンテナ(米国の海運業者APL=アメリカン・プレジデント・ラインズ、その親会社APC=アメリカン・プレジデント・カンパニー所属)140個が相模補給廠から横浜本牧埠頭D突堤に運ばれた。新聞社機は、コンテナの中身の大部分が大量の波型鉄板であることを確認した。戦場の構造物の資材であろう。積まれた船はプレジデント・タフト号、プレジデント・グラント号である。

相模補給廠からは、横田基地経由で空路湾岸地域への補給も行なわれている。相模補給廠監視団は2月3日、7台のトラックで段ボール箱が搬出されるのを目撃したが、ラベルから段ボールの総数は180個であり、行く先は横田経由ダーラン(サウジアラビア)であることが判明した。中身は不明である。

■戦闘部隊 2. 空母-1

退役直前の参戦 空母ミッドウエー

日本から中東に出動した最大の戦闘集団は横須賀を母港にする空母ミッドウエーである。搭乗する第5航空団を含めて、約4500人を擁する。

空母ミッドウエーは今夏退役し、サンジェゴを母港にしているインデペンデンスと交替するという発表が、一年前になされていた。退役直前のミッドウエーが、今回の中東派遣を命ぜられたのがいつであるか判然としない。横須賀を出航したのは10月2日であるが、乗組員には湾岸行きは知らせられなかった。北海道近海での海上自衛隊との共同演習を終えた10月12日に公式の湾岸行きが告げられたという。6カ月の通常の任務期間を仮定すると、予定通りの退役には間に合う。現在のところ予定通りの退役説が強い。